

村へ歸った傷兵

小川未明

青空文庫

上等兵、小野清作は、陸軍病院の手厚い治療で、腕の傷口もすっかりなおれば、このごろは義手を用いてなに不自由なく仕事ができるようになりました。ちようどそのころ、兵免令が降つたので、彼はひとまず知り合いの家におちついて、いよいよ故郷へ帰ることにしたのであります。

胸の右につけられた、燦然として輝く戦傷徽章は、その戦功と名誉をあらわすものであると同時に、これを見る健全の人々は、この国家のために傷ついた勇士をいたわれという、温かい心のこもる貴いものでありました。どこへいくときにも、身につけよと、上官からいわれたのであるが、何事にも内気で、遠慮勝ちな清作さんは、同じ軍隊におつて朝晩辛苦をともにした仲間で、死んだものもあれば、また、いまも前線にあつて戦いつつある戦友のことを考えると、自分は武運つたなくして帰還しながら、なんで、これしきの戦傷を名誉として人に誇ることができようか、しかも戦争はなおつづけられているのだ。自分には、すこしもそんな気持ちがなくとも、この徽

章をつけていれば、あるいは人々にそうとられはしないかというとりこし苦労から、なるたけ外へ出るときにもこれをつけぬようにしていました。

しかし、今日は、故郷へ帰ることを申しあげに、靖国神社へお詣りをするのであります。清作上等兵は、軍服の威儀をただして、金色の徽章を胸につけ、堂々として宿を出かけたのであります。

こうして見る清作さんは、じつにりっぱな軍人でした。だから町を通ると、男も女も振り向いて、その雄々しい姿をながめたのです。けれど中には、ぽかんとして、無表情な顔つきで見送るような、子供を背負った女もいました。

「世間の人たちは、勲章とでも思っているのかな。」

清作さんは、顔に微笑をうかべました。なぜ彼はそんなことを思つたでしょう。それは、この人たちの顔に、戦傷徽章に対しても、なんのかなしみの影が見えなかったからです。

このときあちらから、紳士ふうの若い男と、頭髪をカールして、美装した女の人がきかかり、やがて彼とすれちがったが、その人たちは、まんざら学問のない人とは思われなかつたのに、やはり徽章には気のつかぬようなようすでいきすぎてしまいました。

「私は、いままであまり思いすぎていたようだ。」と、清作さんは、つぶやきました。なぜなら、世間は、戦争にたいして無関心なのか、それとも軍人が戦争にいつて負傷をするのをあたりまえとも思っているのか、どちらかのようにしか考えられなかつたからでした。けれど人間であるうへは、同胞がこんな姿となつたのを見て、なんとも心に感じないはずがあるうかと考えると、むらむらと義憤に燃えるのをどうすることもできませんでした。

「なに、いつの時代にもくさつた人間というものはいるものだ。」

青々とした空をあい、深い呼吸をつづけました。

靖国神社の神殿の前へひざまずいて、清作さんは、低く頭をたれたときには、すでに討死して護国の英霊となつた、戦友の気高い面影がありありと眼前にうかんできて、熱い涙が玉砂利の上にあふれ落ちるのを禁じえませんでした。この瞬間こそ、心が悲しみもなく、憤りもなく、自分の体じゅうが明るく、とうとく感ぜられて、このまま神の世界へのぼつていくのではないかとさえ思われたのであります。

お詣りをすますと、後に心をひかれながら、九段の坂を下りました。そして、町の停留場へきて電車をまっています。身の周囲を見ても知らぬ人ばかりであつたが、

突然口ひげの生えた角顔の男の人が、彼の前へやってきて、ていねいに頭を下げました。

清作さんは、あまりだしぬけだったのと、その人の顔を見て、覚えがなかったので、びつくりしながら、たぶん人違いであろうと思いました。すると、その人は、

「ご苦労さまでした。どこをおげがなされましたか。」と、静かな調子で、たずねました。

「ああ、私の傷ですか、こちらの腕をやられました。」と、清作さんは左の腕を指しました。そして、よく戦傷徽章に目をつけて、たずねてくれたと、深く心に感謝しながら、じつとその人を見たのであります。

「おお、それは、この寒気に、傷口がお痛みになりはしませんか？ 私は、若い時分シベリア戦役にいったものです。いまでも死んだ戦友のことや、負傷した友だちのことを片時もわすれることがありません。」

その老人の目はかがやき、言葉は熱をおびて、顔かたちにしみじみと真情があらわれていました。これをきくと、清作さんは、はじめて見るこの人にたいして、かぎりなき懐かしさと敬意を表せずにはられません。しぜんとその人の前に頭が下がるのを感じ

ました。

ほどなく、電車でんしゃがきたので乗のつたけれど、停留場ていりゆうじょうで見送みおくる、老人ろうじんの顔かおが、いつまでも頭あたまに残のこりました。おりあしく、その電車でんしゃは満員まんいんでした。彼はかれ、右手みぎてでしつかりと釣り革つりかわにぶら下がさっていたが、あちらへおされ、こちらへおされしなければなりません。そして、こんなばあいに、これらの人ひとたちが、彼の徽章かれのきしょうに注意ちゅういすると考かんがえるこそ、まちがつていたのであります。彼かれが、顔かおを赤あかくしてたおれまいとしたとき、「兵隊へいたいさん、ここへおかけなさい。」という子供こどもの声こゑが、きこえました。見みると混雑こんざつした人ひとをわけて立ち上あがったのは、八、九歳さいばかりのランドセルを負おつた二人ふたりの小学しょうがく生せいでありました。

「やあ、ありがとうございます。」と、清作せいさくさんは、救すくわれたような気きがして、そこへ腰こしを下おろしました。そして、はじめて二人ふたりの子供こどもを見みると、子供こどもは、なにかいいたげに、清きよらかな瞳ひとみを人々ひとびとの間あいだから、こちらへむけているのでした。

「ああ、子供こどもはいいな。」と、清作せいさくさんは、真しんに感動かんどうしました。

その晩のことでした。清作さんは、故郷へ帰る汽車の中なかにいたのであります。彼は、眠ろうとしても眠られず昼間のことなど思い出していました。

「そうだ。村の源吉さんもシベリア戦役せんえきにいつて、片腕かたうでをもがれたのだった。あの時分じぶん、自分じぶんはまだ子供こどもだったので、源吉さんが不具かたわになって帰つてくると、おそろしがつたものだ。自分ばかりでなく、ほかの子供たちも気味悪きみわるがつてそばへいかなかったのだ。それにくらべると、このごろの子供は、なんとというりこうで、やさしいことだろう。源吉げんきちさんは、みんなのため、戦争せんそうにいつてきながら、寂しく、かわいそうだった。その後病氣びやうきのため死しんでしまったが、こんど帰つたら、お墓はかへお詣りまいをして、昔むかしのおわびをしなければならぬ。」

夜中よなかごろ、汽車は山間やまあいにかかりました。山には雪ゆきがつもっていました。急に寒きゆう気がくわわつて、忘れていた傷口きずぐちがずきずきと痛み出いたしました。

「あの老人ろうじんは、しんせつにも傷口きずぐちが痛みはしませんかときいてくれたが……。」

清作せいさくさんは、自分じぶんよりは、もつと大きな負傷ふしょうをしたり、また手術しゆじゆつをうけたりした傷兵しょうへいのことが、思い出おもされたのでした。あの人たちひとは、いまごろ、どこにどうして

日を送っているだろうか。このごろの寒さに、傷口がひきつって、さぞ痛むことであろうと、案じられたのでありました。

清作さんが、村へ帰ると、さすがに村のものは、温かい心をもつてむかえてくれました。そして、清作さんの喜びは、それだけではなかったのです。みんなが今度の聖戦は、東洋永遠の平和のために、じゃまになるものは、いっさいをのぞくのであるから、簡単にいくわけがなく、戦線と銃後を問わず、心を一つにして、ともに苦しみ、助け合い、最後の勝利を得るまでは、戦わなければならぬということを、よく知っているからでした。

自分の体でできることなら、清作さんは、どんな仕事でも喜んでする決心でありましたが、さいわいに、村の産業組合に適当な勤め口があつて、採用されたので、いよいよこれから銃後にて、お国のために余生を捧げることにしたのです。

やがて、三月の季節となりました。春がこの村にも訪れてきたのであります。ある日、清作さんは、村の子供たちをつれて、帰ったら、かならずいこうと思つていた、源吉さんのお墓へお詣りをしました。そこは、小高い山でありました。

「さあ、これが話をした源吉さんのお墓だ。お国のためにつくした村の勇士だ。みんな

よくお礼をいって拝みなさい。」

子供たちは、お墓の前にならんで、手を合わせて頭を下げました。南の方へゆるやかに傾斜して、陽のよく当たる丘のなかほどに、つばきの大きな木があつて、赤い花が咲いていました。黄色な小鳥が、その枝にきて遊んでいたが、目を送ると、そのふもとの方には、わらぶきの家があつて、三、四本の梅の木のつぼみが白くなりかけていました。

徐州、徐州と人馬は進む

徐州いよいよか、住みよいか

と、子供の中から、孝ちゃんが、ふいにうたい出した。清作さんは、これをきくと、きつと頭を上げて、思い出したように、

「そうだ。ちようどもう二年前になるな。私はその徐州へ進軍する、列の中へ入っていたのだ。みんなここへおすわり。そのときのことを話してあげよう。」

「おじさん。戦争の話、どんな話？」

「いろいろ話があるが、思い出したから、まずその軍馬からだ。」

「軍馬？」

孝ちゃんと三ちゃんと、勇ちゃんと、武ちゃんは、清作さんを取り巻くようにして、

枯れ草の上へすわりました。

「徐州へ進軍のときは、大雨の後だったので、たぶん僕たちの前に出発した馬だろう。足をすべらしたんだな、がけ下のどろ田の中へ落ちて、体を半分埋めながら、そこを列が通ると上を向いて鳴いていた。助けてやろうにも、ちよつと助けようがないのだ。それに先を急いでいるのでな。いっしょにここまで来た友達ちで、かわいそうに思ったが、頭を下げて、そこを通り過ぎてしまったよ。」

「かわいそうに、その馬どうなつたろうか。」

「くを出てから幾月ぞ、ともに死ぬ気でこの馬と、攻めて進んだ山や河……。ほんとうに、そうだった。みんなが馬を見返り、見返り、泣きながらいったよ。」

「僕たち、こんど慰問袋の中へ、お馬にやるものも入れて送らない？」と、孝ちゃんが、

「お馬には、図画や、つづりかたはわからないね。」と、小さな勇ちゃんがいったので、みんなが大笑いをしました。どこか遠くの方で鳴く鶏の声が、のどかにきこえてきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「日本の子供」

1940（昭和15）年4月

※表題は底本では、「村《むら》へ帰《かえ》った傷兵《しょうへい》」となっています。

※初出時の表題は「村へ帰った傷兵」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

村へ帰った傷兵

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>